

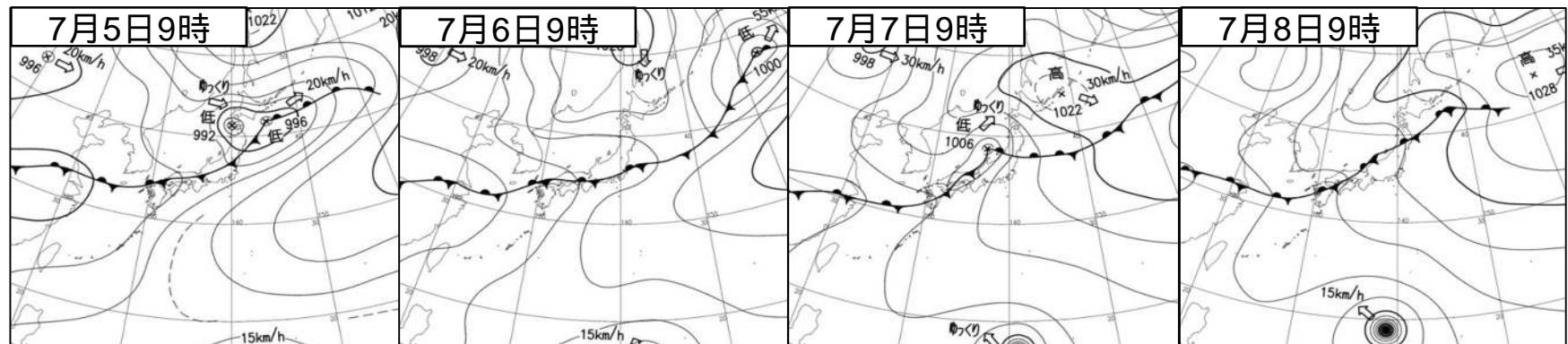
平成30年7月豪雨について

「平成30年7月豪雨」の概要

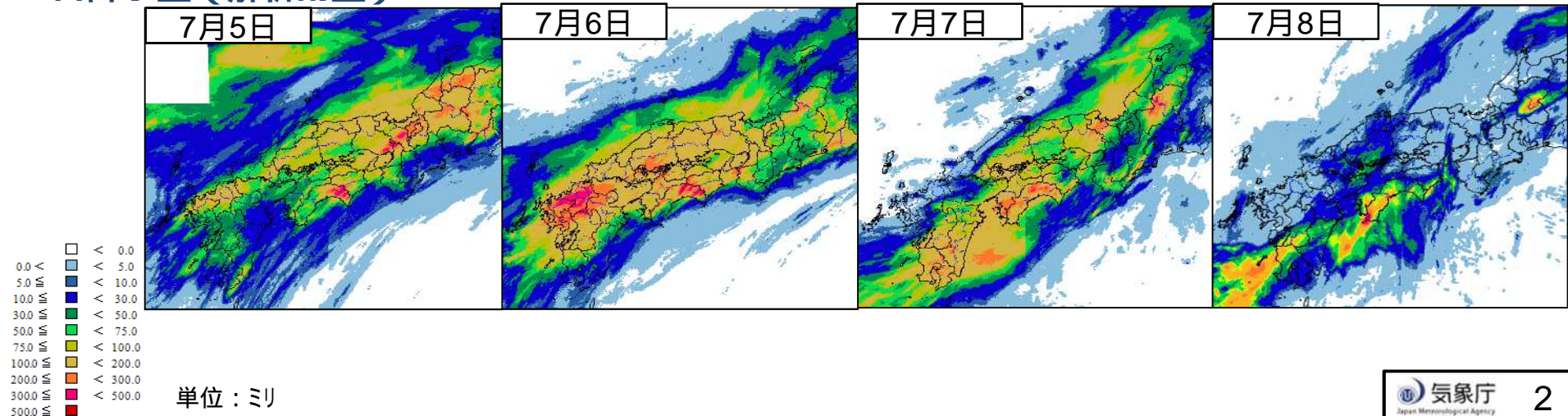
【概要】

台風第7号から変わった温帯低気圧が、7月5日には本州付近に停滞していた梅雨前線と一体化した。梅雨前線は、暖かく湿った空気が継続して流れ込んだ影響で、活動が非常に活発となった。この状態が、7月5日頃から8日頃まで続いたため、西日本から東海地方を中心に記録的な大雨となった。

天気図

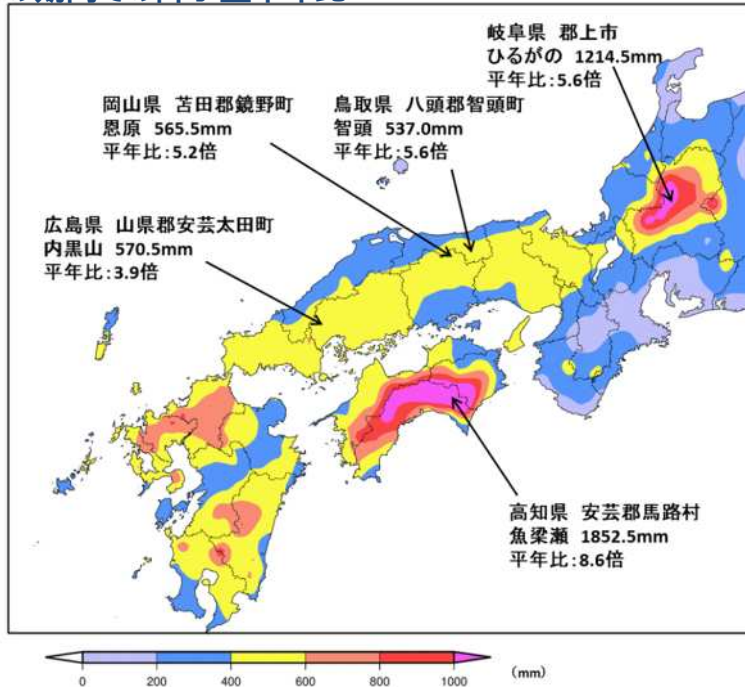


日降水量（解析雨量）

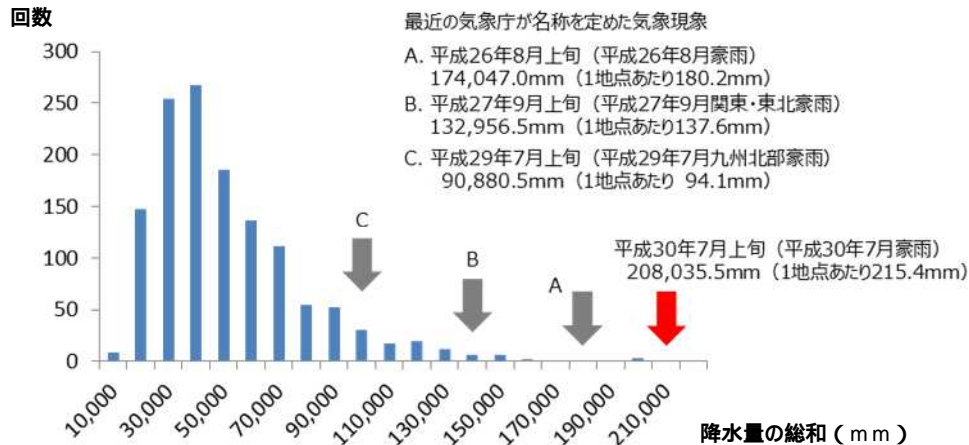


「平成30年7月豪雨」の雨量の状況

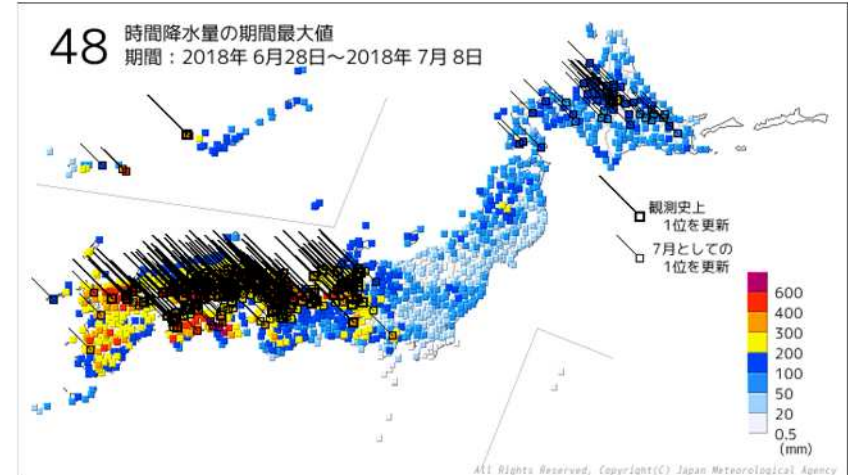
6月28日から7月8日までの総降水量（アメダス）とその期間での降水量平年比



全国のアメダス地点（比較可能な966地点）で観測された降水量の総和（1982年1月上旬から2018年7月上旬における各旬の値の度数分布）

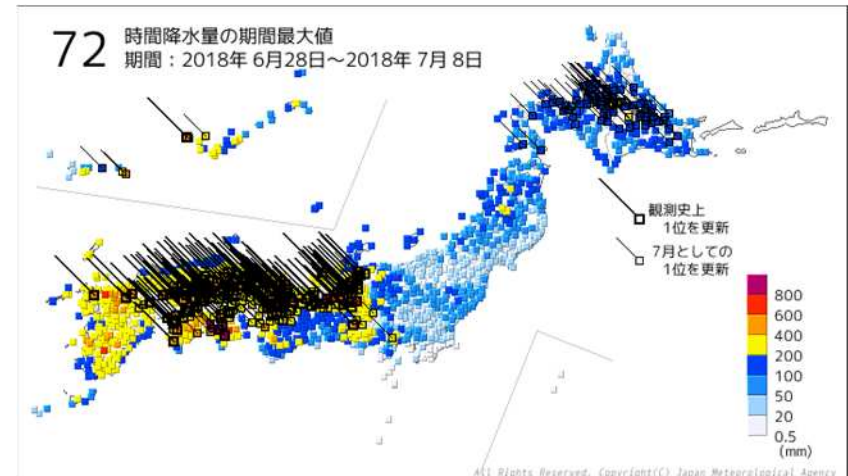


6月28日から7月8日までに観測された最大48時間雨量（アメダス）



観測史上1位を更新した地点数：124地点
7月としての1位を更新した地点数：239地点

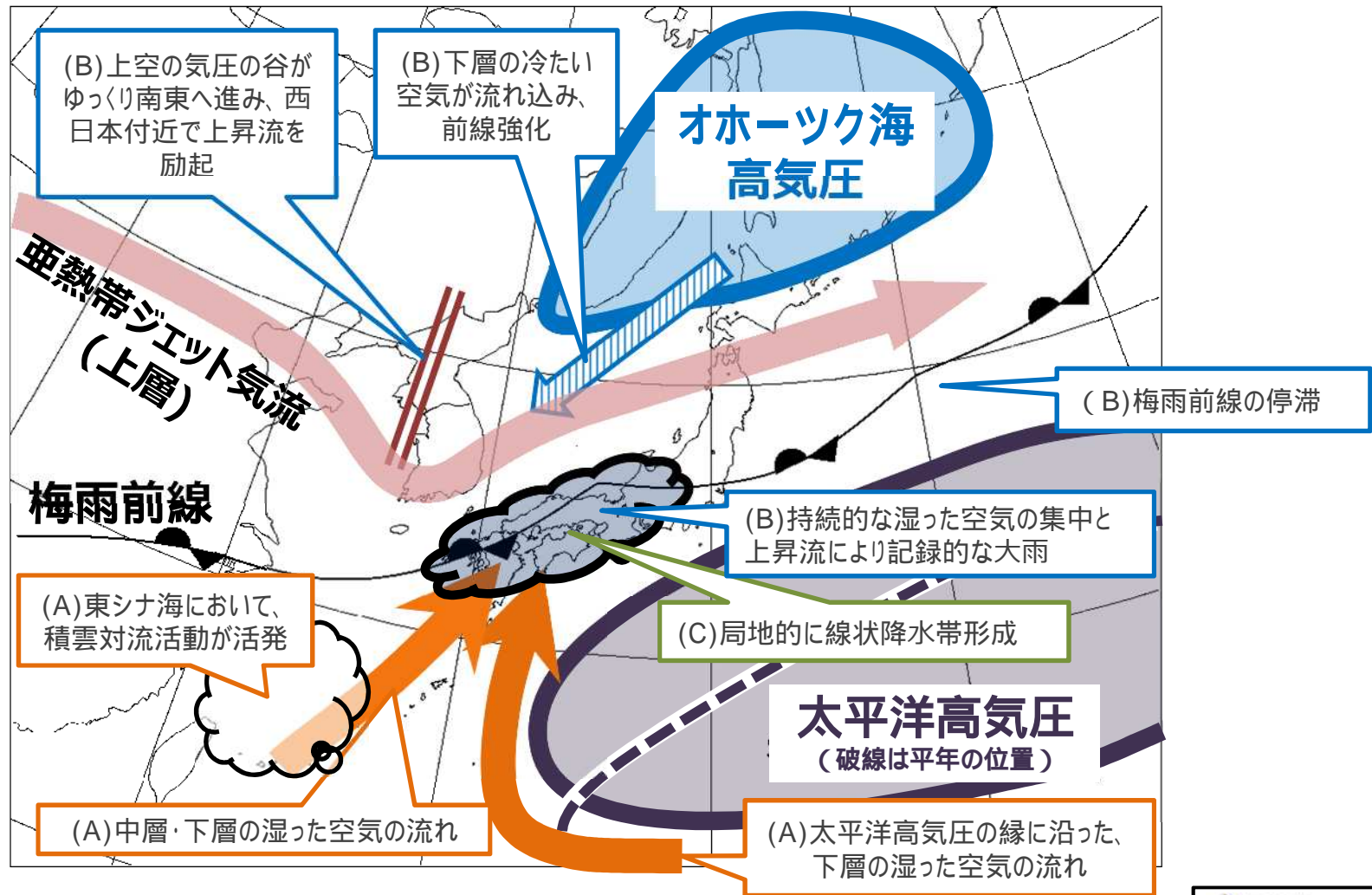
6月28日から7月8日までに観測された最大72時間雨量（アメダス）



観測史上1位を更新した地点数：122地点
7月としての1位を更新した地点数：264地点

「平成30年7月豪雨」の大雨の発生要因

- (A) 多量の水蒸気を含んだ湿った空気の2つの流れ込みが西日本付近で合流し持続
- (B) 梅雨前線の停滞や、下層の冷たい空気の流入に伴う梅雨前線の強化などによる持続的な上昇流の形成
- (C) 局地的な線状降水帯の形成

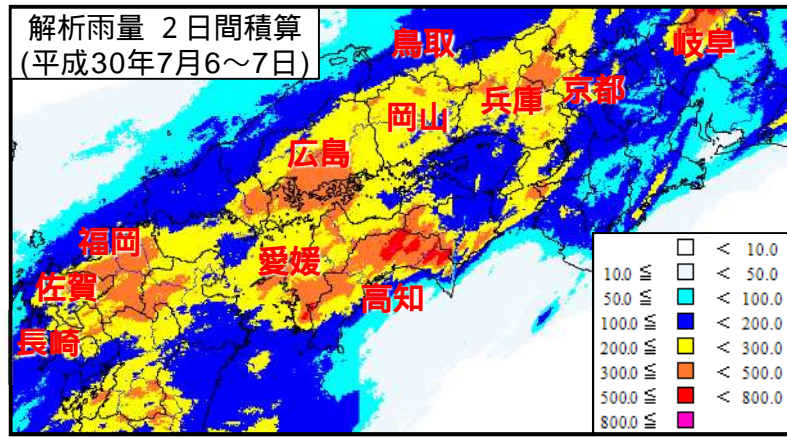
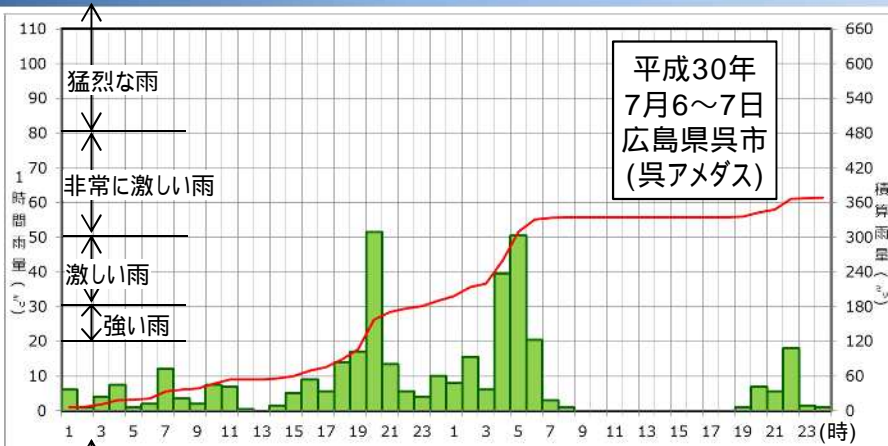


7月5日から8日の記録的な大雨の気象要因のイメージ図

「平成30年7月豪雨」と「平成29年7月九州北部豪雨」等との比較

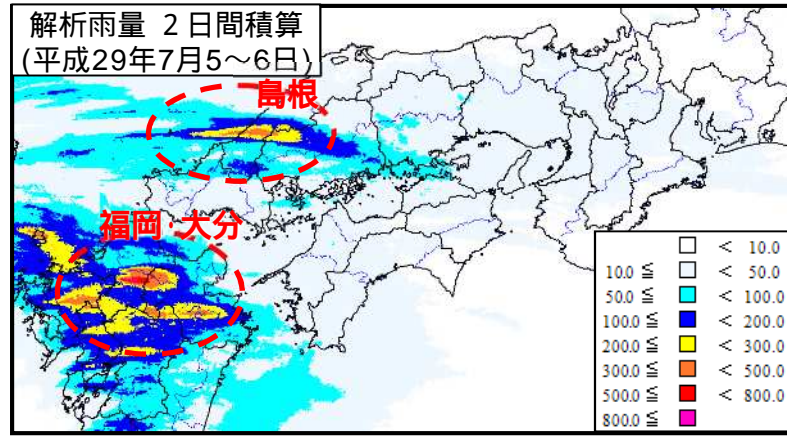
平成30年7月豪雨

長い範囲で、強い雨、激しい雨が長時間降り続く事例



平成29年7月九州北部豪雨

局地的だが、非常に激しい雨が断続的に数時間に渡って降り続く事例



平成26年8月豪雨

局地的だが、非常に激しい雨が降る事例

